

身近な気象情報に対する認識について

-オンラインアンケートの結果から-

牛山素行(岐阜大院・連合農学・信州大配置)

1. はじめに

近年は観測・予報技術や、テレビ等を始めた情報伝達システムの発達により、豊富な気象情報が一般に利用可能な形で提供されている。しかし、それらの気象情報が、的確に理解されて認識されているかどうかについてはやや懸念があり、ことに降水量情報については「mm」という単位がわかりにくいのではないかと指摘がなされているが(岡部, 1995)、定量的な検討例はまだ少ない。筆者はすでに気象情報に対する認識について、記入式アンケートによる調査を信州大学、都立大学において実施し、その結果についても報告している(牛山・松山, 1996)。その後、このアンケート結果などを踏まえ、主に降水量情報の質に関する情報を発信することを目的としたホームページを開設し、合わせてこのホームページ上で、降水量情報に対する認識についてのオンラインアンケートを実施したので、その結果を報告する。

2. 調査手法

ホームページは、信州大学農学部サーバー上に、1996年7月5日から開設をはじめた。ホームページ中にアンケートのページを作成し、フォームに従って回答していくと、自動的に結果が電子メールとして筆者の元に届くようなシステムになっている(送信の有無は選択可能)。ホームページ自体の来訪者は、おおむね1日に10~20人程度であり、アンケートの回答メールは、システムの異常などの理由がない限り、ほぼ毎日1通以上は届いており、アンケートのページを開設した7月8日から8月18日までの42日間に、計86通の回答が寄せられている(図1)。本ホームページは、信州大学農学部ホームページ、高知大学情報科学科気象情報ページなどにリンクを張っていただいているほか、いくつかの検索エンジンにも登録している。解答者の母集団としては、気象情報に何らかの関心を持っている人が中心になっていると思われる。

3. 結果

回答者の居住地は、関東地区が約4割で最も多いが、他地区からの回答もよせられており、ほぼ全国的に回答が寄せられている状況である。降水量の単位を問う設問では、[mg]という回答はなかったが、[ml]を選んだ回答者が2割ほどあり、信大・都立大での調査結果と同様な傾向が見られた。AMeDASの設置場所を問う設問では、「建物や地形などの影響を受けにくい場所」という回答が6割以上を占め(表1)、AMeDASの設置密度を問う設問でも、「20km四方に1ヶ所程度」と言う回答が5割以上を占め(表2)、これらの情報については予想以上によく理解されていることが分かった。「1時間に何ミリ以上の雨が降ったら災害の危険があると思うか」という設問に対しては、40mm以上の大きな値を挙げた回答者が半数以上に上った(図2)。このことから、降水量については、単に予想される量を示すだけでは十分な警戒心を持ってもらえないことも懸念される。

岡部昭正, 1995: 天気相談所の窓「雨量って何ですか?」, 気象, 39, 14031

牛山素行, 松山洋, 1996: 身近な気象要素に対する認識について, 日本地理学会予稿集, 50

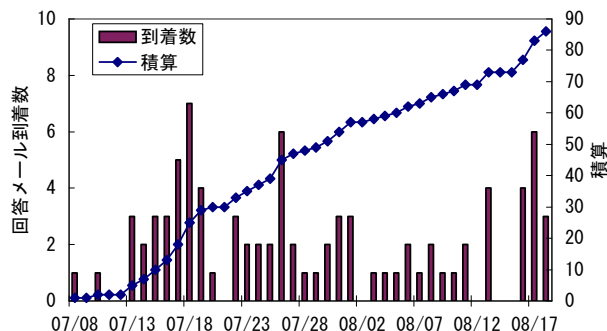


図1 アンケート回答メールの日別到着数

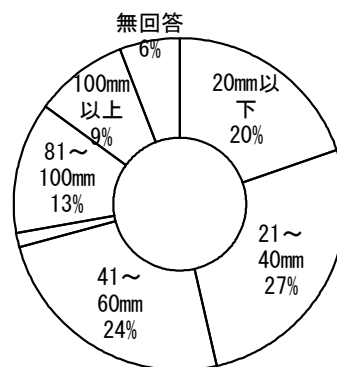


図2 災害の危険のある1時間降水量に関する回答

表1 AMeDASの設置場所に関する回答

市役所など自治体の中心街付近	6
周囲に建物の少ない郊外	2
建物や地形などの影響を受けにくい場所	56
特に基準はない	14
わからない	8

表2 AMeDASの密度に関する回答

20km四方に1ヶ所程度	46
10km四方に1ヶ所程度	16
5km四方に1ヶ所程度	8
すべての市町村に1ヶ所以上	4
すべての市と主な町	1
人口1万人当たり1ヶ所程度	2
わからない	9